

2006年1月8日 降誕節第3主日・公現日礼拝

『永遠の契約』

(創世記17章1~2, 9~14節, マタイ3章13~17節)

今日は、公現日です。イエス・キリストが公のご生涯を始められたことを覚える日です。1月6日がその日に当たりますが、それに一番近い日曜日を公現日礼拝として世界中で守っています。この公現日にあたって、マタイによる福音書から、イエス様の洗礼記事を読みました。

イエス様は、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになりました。ヘロデ王が、幼いイエス様の命を狙っている。主の天使がこう告げたので、両親はエジプトに逃れて行きました。その後、幼子イエスの命を狙う者はいなくなったとお告げを受けて両親は、ガリラヤのナザレという町で暮らすようになりました。イエスさまも、両親と共にナザレに行きそこで育ちました。こうして、イエス様が誕生して三十年程過ぎました。

そのころ、バプテスマのヨハネがユダヤの荒野でこのように宣べ伝えたのです。「悔い改めよ。天の国は近づいた」と。エルサレムとユダヤ全土から、ヨルダン川沿岸の地方一帯から人々がヨハネのもとに来て罪を告白し、ヨハネから洗礼を受けていました。人々は、もしかするとこのヨハネが、神様が約束したあのメシアなのではないかと考えていました。ヨハネは、人々に告げました。「わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その方の履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」(マタイ3章11)と。このヨハネよりももっと優れた方とは、一体どのような方なのか。人々には、想像もつきませんでした。

その日、そのときも、沢山の人が洗礼を願ってヨハネのところに集まっていました。「そのとき、イエスが、ガリラヤから、ヨルダン川のヨハネのところへ来た。彼から洗礼を受けるためである」ヨハネは、驚きました。人々に混じって、イエス様がヨハネから洗礼を受けようとしていたからです。この人は、わたしの後から来るあの方ではないか。その方が、なぜわたしのところへ。それで、ヨハネはイエス様を思いとどまらせようしました。「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか」。どうして、イエス様はヨハネから洗礼を受けようなさったのか。わたしたちも、ヨハネと同様にとても不可解です。イエス様は、なぜ悔い改めの洗礼を受けようとなさったのでしょうか。イエスさまは、何か罪を犯していたということでしょうか。そんなことは、ありません。

イエス様は、ヨハネにお答えになりました。「今は、止めないで欲しい。正しいことを全て満たす事が、我々にふさわしいことです」と。これが、イエス様の公の生涯の最初の一言でした。正しいことを全て満たす。そのために、罪のないイエス様が罪人達と一緒に洗礼をお受けになる。それが、どうしても必要だと、イエス様は言われました。このイエス様の言葉に、バプテスマのヨハネも従いました。罪人たちと一緒に洗礼を受けることで、

イエス様の公の生涯は始められたのです。

罪人たちと共におられた。これが、イエスさまが生涯を通して貫かれた姿勢です。イエス様は、人々から嫌われ、罪人と呼ばれる人々にも何の分け隔てもしませんでした。そのために、人々から悪口を言われたことも少なくありません。例えば、イエス様が徴税人マタイを弟子にした時もそういうことがありました。イエス様は、収税所に座っているマタイを見かけて言いました。「わたしに従いなさい」と。マタイは、すぐにイエス様に従い弟子になりました。弟子になったばかりのマタイは、イエス様や他の弟子達を食事に招待します。その時、徴税人や罪人たちも大勢イエス様のところにやってきました。イエスさまに出逢ったことが嬉しくて、マタイは同僚や友人達にも呼びかけたのです。この様子を見て憤慨した人たちがいました。ファリサイ派の人たちです。この人たちは言いました。「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事ををするのか」と。ファリサイ派の人は、イエス様に反対するグループの代表格の一つです。このファリサイ派の人たちは、当時のユダヤでも嫌われていたのでは、とわたしたちは思っています。しかし、実際はそうでもありません。当時のユダヤの人たちはファリサイ派をこう見ていました。あの人たちは、信仰深く、謙虚で、行ないも高潔で立派な人たちだと。当時のユダヤの人たちはむしろこの人たちを尊敬の眼差しで見えていました。それは、全く根拠のないことでもありません。不正を避けて、神様への捧げものを欠かしたこともない。それは、自他共に認めてもよいことです。神様の前でも人の前でも自分たちは正しいことをしているつもりでした。しかし、ファリサイ人たちは、徴税人や罪人がイエス様と一緒にのを見て憤慨しました。罪人がイエス様のところに来るのを喜べなかったのです。

自分たちは、他の人たちよりも正しいと思い、罪人と呼ばれる人たちを見下している。それが、ファリサイ派の人たちでした。

この人たちの姿は、わたしたち自身のことでもあります。わたしたちは皆、生まれながらの罪人です。それなのに、自分は他の人よりはましだ。わたしたちは自分の罪深さを棚に上げて、他の人たちを憎み軽蔑してしまう。世の中は、ますます悪くなって病んでいる。でも、自分だけは健全だと考える。それが、わたしたちの罪深さです。上辺は、神様を敬って謙遜なように見える。だけど実際には、神様から心が離れ自分を誇り他人を軽蔑している。それが、わたしたちなのです。そんなわたしに向かってイエス様はこう言われたのです。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。...わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マタイ9章12～13)と。

神様は、わたしたちとは全く違います。神様は、どこから見ても一点の曇りもない正しい方です。正しい神様は、罪人のわたしたちのことを決して軽蔑したりしない。わたしたちの罪深さや、罪のために抱えた弱さに心から同情し憐れむかたです。それがわたしたちの天の父です。罪人を御自分のもとに招くこと。罪人と共にあること、それが神様の正しさです。インマヌエル、神は我々と共におられる、とはそういう意味であったのです。罪人のわたしたち、神に反逆するわたしたちを救おうとなさる。これが、正しい神様のご意

志です。そのために、神は愛する御子を与えてくださいました。罪人と同じ立場に立ち、罪人を救いに招くためにイエスさまは、世に来られました。イエス様は、公の生涯の始まりに罪人と共に洗礼を受けました。その時、聖霊がイエス様の上に降り、天からの声が聞こえました。「これは、わたしの愛する子、わたしの心に適うもの」とであると。この神の声は、ヨハネとその場にいた他の人たちのために、わたしたちのために語られたものです。イエスが、神の遣わした愛する独り子である。この方は神の御心に完全に適う方である。この主イエスに従うことが神の御心に適う道であるのです。イエス様は、その生涯を通して神の御心に適った歩みをなさいます。罪人を救いに招き続けます。その生涯の最後に、イエス様は、わたしたちの罪の償いのために、自らの命を差出されたのです。神の子は、最後まで罪人の立場に身を置いて、わたしたちを罪から贖いだしたのです。わたしたちのために、神の子は洗礼を受け、十字架で苦しみを受けました。イエス様は、神の御心に従い通して行きました。

主イエスは、十字架の死に至るまでわたしたち罪人の立場に立ってくださったのです。主イエスが、生涯を通してわたし達罪人を救いに招いてくださったのです。だからわたしたちも、主イエスの招きにふさわしく歩んで行きたいと思います。「あなたはわたしに従って歩み、全きものとなりなさい」(創世記17章1)「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」(マタイ5章46節)。このイエス様の言葉は、キリスト者の完全と言う言葉の由来です。クリスチャンは、完全への道に招かれているのです。言い換えれば、この道は、イエス様に従う道です。イエス様は、最後まで神の御心に従って従順に歩みました。十字架で息を引き取る瞬間まで、神様に御自分を委ねました。わたしたちも、イエス様がなさったのように、自分に敵意を持つ人のために祈りましょう。そして最後まで自分を神に明け渡して委ねて行きたいと思います。イエスのみ言葉に従って、神に委ねて生きましょう。この道は、永遠の救いに至る道だと主は約束されています。イエスは、世の終りまでわたしたちと共におります。わたしたちに先だってこの道を進まれる主にこれからも従って行きましょう。 [説教者：堀地敦子牧師]